

室戸ジオパークにおける集落立地から探る人々の地震への対応

—特に戦国末期の「長宗我部地検帳」に注目して—

藤田 裕嗣 (神戸大学大学院人文学研究科)

Hirotsugu FUJITA
Graduate School of Humanities, Kobe University

I. 研究の視座（先行研究と問題点、問題解決のための方策）

歴史地理学の立場から室戸ジオパークの現況を表現すれば、自然環境の基盤の上に、そこに住む人々との間で長年の間、結びついてきた関係の結果、と言える。ジオパークが位置する高知県室戸市は、南海地震や東南海地震による被災が予想される。地震の予知は現在の科学水準でもできない。対策としては、数秒前に発信される「緊急地震速報」よりも、日頃の備えこそが重要なのである。

歴史的経緯を重視する本研究では、歴史地理学の観点を重視して、土地の履歴を史料と歴史的景観の踏査から検証して、減災・防災にも応用させようと考えた。四半世紀前にも当たる阪神・淡路大震災では家族や近隣の人達が力を合わせたことで、多くの人命が救われており、地域共同体がキーを握っている、と言える訳で、この経験を今後に生かすのが有効だと考えられるから、である。

過去の具体的な被災の様相は、将来に向けた防災・減災にとって不可欠の情報であり、学ぶ必要性は高いが、地震それ自体の文字史料は、近代以前について特に少ないのが実情である。しかし、幸いにして戦国末期の土佐国については、戦国大名の長宗我部元親によって一国が初めて統一され、天正年間に「長宗我部地検帳」が作製された。一国レベルで天正検地帳が残された唯一の史料として、文献史学では評価が高いことは、注目に値する。この史料に基づき、申請者が拠って立つ歴史地理学の観点から現地調査を施せば、当時における集落の位置が判明し、その後の移転の有無も抑えられると期待される。移転している場合、津波が契機だった可能性も、考えられる。

その関係で、高知県立歴史民俗資料館所蔵の文化 14(1817)年「土佐国浦々之図」は、室戸市内「浦」の絵図が 2 点、含まれており、注目される（具体的には「津呂浦分飛鳥・椎名」と「津呂浦分三津浦・東寺領高岡」）。

室戸市内について「長宗我部地検帳」を分析した先行研究として、目良（2018）が特筆される。目良氏は、上記の「浦之図」を所蔵している同館の資料調査員を務めており、幸いにも同絵図の電子データ入手にも便宜が与えられた。将来に向けた防災・減災に寄与する意図を持つ本研究では、同様に同館の資料調査員で、考古学を研究されている宮里修氏（高知大学人文学部）とも連携し、共同で研究を進めた。

II. 成果（調査及び研究の結果とそこから得られた新しい知見）

1) 「長宗我部地検帳」安喜郡に次のような部分がある。

冒頭に「土佐国安喜郡津寺分地検帳之事

合天正拾五年丁亥十一月十九日」（1587）と記され、以下のように続いている。

「 ツル堂 室津村 神兵衛抱（手偏に□）

一所 廿五代 出壺反十五代四分、中畠 十二月ノ仏供テン 津寺分」

「津寺」とは、室戸市中心部、室津港に位置する四国八十八か所、第二十五番札所、津

照寺を指している。「十二月ノ仏供テン」として登録されているが、実は地目は「畠」で、等級は中、すなわち、当初は仏供田だったのだが、天正期には畠に変じていた、と判る。所在地名は「ツル堂」、とされており、ホノギ地名と読み慣わされている。「室津村 神兵衛」が、権利を与えられていた。

さらに 20 筆分を略すると、次のように登録されている。

「津寺坊ヤシキ	同村 大坊
一ノ(所) 四十代 中ヤシキ、寺中	同 し
この部分では「津寺坊ヤシキ」、「大坊」、「寺中」などとあり、津寺の本堂を中心とした部分と考えられる。地目は「中ヤシキ」、面積の「四十代」とは1反(段)の 4/5 に当たる。すなわち、1反(段)は50代である。	
さらに 25 筆分を略して 11 月 22 日の登録分になり、17 筆目に以下のようにある。	
「アマタ神ノ北ウラ	同村 室津抱(手偏に□)
一ノ(所) 六代 下	同 し
同しノ後	同村 神五抱(手偏に□)
一ノ(所) 七代 中	同 し
同しノ後	同村 室津抱(手偏に□)
一ノ(所) 三代 サンハク	同 し
神ノ後	同村 手作分
一ノ(所) 七反卅代 下々川成	同 し
カマワラ	同村 神兵衛抱(手偏に□)
一ノ(所) 七反 下々 川成	同 し
神ノ後	同村 神六み(=居)
一ノ(所) 十六代二分 サン□ヤシキ	同 し
シモ岡ノ前	同村 神兵衛抱(手偏に□)
一ノ(所) 卅代 下々	同 し
同しノ東	同村 神兵衛抱(手偏に□)
一ノ(所) 廿代 下々 川成	同 し
同しノ西	同村 手作
一ノ(所) 卅代 出十七代、中	同 し
同しノ西	同村 神兵衛抱(手偏に□)
一ノ(所) 五代 中畠	同 し

「アマタ神ノ北ウラ」のホノギから「後」、さらにその「後」、と3筆目に「神ノ後」とあるのに注目したい。というのは、室戸市役所で使われている小字、「数多神北」「神ノ後」に相当する、と考えられるからである。小字分布図で前者は室津のNo. 61「数多神北」であり、現地調査を施したところ、1972年に室津の町中から遷座したと「室津八幡宮遷宮記念

碑」に書かれているが、八幡宮の本殿の右手に、玉垣に囲まれた「大神宮」「惟宗神社」「若一王子宮」の3セットを確認した。「東若者中」などと書かれた玉垣自体が古いと考えられ、この社地自体が、「数多神」に関わるものと考えてよからう。

小字名の「数多神北」「神ノ後」は、『長宗我部地検帳』のうち1587年「津寺分地検帳」に見えるホノギ名、「アマタ神ノ北ウラ」「神ノ後」に相当する、と考えた。ほぼ間違いのない、と判断される。

2) 「アマタ神ノ北ウラ」「神ノ後」の東方、室戸高校周辺の「山田」地区は、山合に開かれた谷に小さな水田が寄り添っている。この風景を観察した筆者は、1980年に京都大学文学部に提出した卒業論文のフィールドとして設定した安芸国沼田荘を想起した。その実証的研究(石井、1974)では中世当時の景観として、「迫田」と表現されていたのである。土佐で史料は『長宗我部地検帳』くらいしかないため、室津の現状で展開されている耕地の各地片が、逐一、いつ開発されたか、確定するのは難しいながら、中世では山麓沿いの「迫田」が耕地の中心、と考えられるであろう。この付近は、内陸に入って迫田が展開しており、開発も古いと思われる。

3) 1589年12月10日「東寺地検帳」で登場するホノギ名について、高岡地区の小字と対照すると、見事なまでに北部に集中的に見られる。

この高岡地区については、本報告の冒頭で言及した高知県立歴史民俗資料館所蔵、文化14(1817)年「土佐国浦々之図」のうち「津呂浦分三津浦・東寺領高岡」が残されている。上記の北部には三津港も描かれる一方で、南端には東寺(=四国八十八か所、第二十四番札所、最御崎寺)も位置付けられている。岬からは朱線で、つづら折りのへんろ道が表現されている。歴史地理学ではへんろ道研究もなされており、それとの対照も、今後の課題となるであろう。

III. 今後の展望(調査及び研究の結果とそこから得られた新しい知見)

ちなみに、集落移転については、「浦々之図」が残る甲浦でも数年前に予察的にトライしてみたが、現況との変化は見て取れないことが判っていた(後の補論参照)。今後とも慎重に検討したい。

我々、歴史地理学者は、何気ない、どこにでもありそうな風景をキーにして、歴史をひも解くことができる。我々の業界では「景観」の「復原」と表現している。

地理学自体は、ギリシャ時代からあったのだが、19世紀に近代地理学が確立した以降、「景観」の「観察」が重要視された。ドイツが中心だったので、「景観」とはLandschaft(英語ではlandscape)、「観察」はBeobachtung(英語ではobservation)と、ドイツ語である。一見すると、文献史学のように見られてしまい勝ちながら、このように、現地調査が重視される点は、あくまで地理学の一科なのであることと連動している。

なお、「サイエンスカフェ」当日に、「数秒前に発信される『緊急地震速報』」に関して、トラフ地震で津波が襲うのは1分程度ある、とのコメントが出たが、報告者が念頭に置いていたのは津波のことではなく、地震そのものの揺れであった。

新年度を迎えるに当たり、幸いに科学研究費が採択されれば、さらに地震碑も含む伝承を調査し、記録した上で、少子高齢化を迎えた現代の諸地域で可能で、有効な伝承の仕方に注目したいと考えている。地籍図を含む古地図も活用して、地域共同体の強化に取り組みようと予定している。今後とも上述したトロイカ体制を続けたい。

IV. 補論（アプローチと得られた知見の発展性、教育やツーリズムへの活用について）

1) 「アプローチ」をめぐって-商品流通の歴史地理学における研究課題

藤田は、歴史地理学の観点に主に立ち、商品流通を研究してきた。歴史地理学の先学である小林健太郎（1986）の研究手法は、地籍図を元にした景観の復原が特徴だと言える。これは、歴史地理学における伝統的な宝刀であった。明治初期に土地所有権を国民に広く認め、土地の所有主から土地に対する税金を徴収することで国家財政の基盤を樹立しようとした一大改革であった。所有主に対して地券を発行して地租徴収を求めた初期制度を修正し、土地台帳が全国的に整備された。歴史地理学が注目した地籍図は、その附属地図であり、全国的に斉一的に整備された最も古い大縮尺地図である。

明治期における屋敷地は、地籍図で「宅地」とされているので、それらから成る集落は明らかに地籍図で跡付けられる。近世までに屋敷地が廃絶した跡も、ある程度（例えば畑として）、地籍図で判る場合もある。これに対して、中世では「市庭」と藤田が表現する、せいぜい十日に3度程度の頻度で開催された定期市が、明治期初頭に作成された地籍図に何らかの遺構を残すのか、という根本的疑問を藤田は小林に対して投げ掛けてきた。結局、小林の研究手法は、この点に真正面から答えられないため、景観論（端的に言うと、地図上の形態論）と分布論とで補っている。

その「景観」も、建築史学が研究対象としている建物自体は、考慮だにされていない点に、藤田は大きな不満を持つに至った。「景観」は、地理学での重要な概念であるが、ちなみに、2005年「文化財保護法」の改正によって登場した「文化財」としての「文化的景観」は、建物も含んでいる。恐らく、建築史学との分担、ないしは棲み分けを考えられたのであろうが、藤田は、建築史学との接合も徐々に目指してきた。近代初頭の地籍図のみならず、近世期の大縮尺絵図も含めて問題にして、中世～近代初頭までの絵図（地図）作成史の中に地籍図を位置づけようとしている。歴史地理学からする「史料批判」の意図を持つ。例えば、「元禄堺大絵図」プロジェクトに結実された（藤田, 2017）。

2) 歴史地理学研究の現代的意義

2011年3月の東日本大震災で、藤田は、阪神淡路大震災で被災した神戸の国立大学に勤めている社会的責任を感じ、復興支援プロジェクトを真剣に考えるに至った。そして、「災

害復興・防災のための地籍図・古地図を活用した GIS データベースの構築」という研究課題を着想し、2012-15 年度まで採択された。この科学研究費プロジェクトで問うているのは、歴史地理学が伝統的な手法として培ってきた地籍図による復原的研究自体が、上述したような、過去を研究するだけでなく、「災害復興・防災」という極めて現代的課題に対処するのに、実は有用だ、という視点である。

過去における景観の復原を第一の課題にして来た歴史地理学者が、「災害復興・防災」という現代的課題にも貢献できる根拠は、現代の景観を見て、地籍図が作成された近代初頭について「復原」できる特殊技能が前提になっている。この「特殊技能」を歴史地理学者は、特殊とも認識せずに身に付けてきた。東北地方太平洋沖地震で津波が発生し、多くの住宅が流されたが、それを再建する課題を考えてみよう。住宅が建つ宅地に対する個人の権利は、土地台帳に由来し、現実の地図や景観との対応は、その附属地図としての地籍図が根本史料になる。しかし、それらが整備された明治初期の測量技術の制約から、正確さは担保されていない点に問題があるが、歴史地理学者は明治初期の地籍図に拠りつつも、現代の地図・景観と比較して、対比し「比定」することができる。地図の上で、より正確に変換すること自体が、「復原」の手法そのものなのである。例えば、藤田の本来の専門は中世であり、歴史的景観を遡るには、さらに中世史料を探って中世の景観を「復原」しようと試みる。明治初期はその原点に当たり、現代の地表面上に明治初頭における土地区画線を辿る技能を持つのである。

日本で地震災害は将来にわたって免れられない訳で、このような技能が、住宅再建という復興に向け、実は役立つ、というメッセージを社会に対して訴えようとしている。

3) 土佐「長宗我部地検帳」研究の意義-甲浦調査に関する当初の意図と現時点での予察

今後の研究の発展を狙って、上述した 1 と 2 とを結びつけられたら、と考えた。その格好のフィールドとして、天正 17(1589)年「長宗我部地検帳」に登録された「町ヤシキ」から成る甲浦が挙げられる。小林(1986)は一覧表に入れているが、地籍図に基づく本格的な景観復原まではされていない。数年前に予備的な調査をした際に、どうも現在の集落には踏襲されていない、と判断でき、津波による移転が想定され、格好のフィールドになる、と直感したのである。

ここでの最大の課題は、「長宗我部地検帳」のうち天正 17(1589)年「甲浦地検帳」に登録された「町ヤシキ」から成る甲浦の町の位置であるが、大よそ判明した。「居」とされた記載から、舟頭、上乘、水主などとされた人たちが住む狭小な「屋敷」が並ぶ典型的な港町は、超願寺が西端にあり、「萬福寺」を経て「西ノ谷」から始まり、東へ、甲浦城の下を東進する小道沿いに並んでいたようである。「上」、「下」の表記は、まさしく地形に対応するらしい。

冒頭は、「土佐国安喜郡浅間庄甲浦地検帳事」とある。「合天正拾七年己丑(1589)二月廿六日」から開始され、翌月 3 日に終わって集約されている。ホノキ名も挙げられている

が、東洋町役場で入手した地籍図の小字地名との対照は、今後の課題であり、以下は、あくまで現時点における予察である。

甲浦村の登録を進める大きな流れとして、p.5に「白浜新開」とあり、甲浦の港町より西南方向にある街村の白浜と考えられ、かつ、「新開」と呼ばれていた。地籍帳の冒頭は、「川内谷」ないしは「河内谷」とあり、河内川の流域から始まっていると考えられる。

考察の中心は、3月1日に登録されている「町ヤシキ」部分に置きたい。甲浦村における位置を考えるには、冒頭の本ノキとその地点から登録されていく方向性が、重要な論点になる。

当日の登録は、「超願寺中内外懸而」と注記された「超願寺（源蓮社持）」3反40代から始まっている。

その直前2/28付けで「法師カ谷」の本ノキを持つ30代に続いて、「超願寺抱（旁は口）源蓮社持」が1筆挟んで2筆ある。本ノキは、カトマリ、同じ谷川ヨリ東（1反29代勺と10代）となっている。その末尾の土地は「同しノ北」1反「萬福寺抱（旁は口）」とあり、「同しノ上寺中」25代中屋敷「寺中 同し」の2筆で終わる。これは、現存する「萬福寺」と考えてよいであろう。

再び「超願寺」に戻すと、上記の土地に続いて、「西谷寺中三段懸而」、34代1分下屋敷 飛脚田「西谷寺領」；「同し東ノ上亀太夫屋敷」31代下屋敷 甚兵衛抱（旁は口）「散田分」という屋敷地2筆が登録されている。そして、「町ヤシキ西北ノハシ小路懸而」、5代2分下屋敷について、「自是町屋敷」とされている。以下は、ほぼ「屋敷」とされており、「町屋敷」の登録が続く。

次は「同し南西ノハシ小路懸而」、「同しノ東小路懸而」とされた屋敷地で、以下、「同しノ東町懸而」が8筆続く（舟頭3名、水主5名）[以下、冒頭の「同しノ」は略す]。

「上半町」「下半町」のセットが4サイクル（面積は4代1分、4代3分、5代；最後だけ4代勺と4代3分）、「北」が3筆、「西ノ上」6代下山畠を挟んで、「奥内生院谷」2反19代3分「土居 桑名将監」が続いている。「クチ南町半町懸而」5代中屋敷「水主 甚兵衛居」を挟んで、「東半町懸而」6代3分中屋敷「水主左衛門二郎居」を先頭に、東半町という本ノキの屋敷地29筆が連続する。

このような形で、約30筆（本ノキは、北下町半町、北半町、東地南町）の屋敷地を挟み、大きな傾向としては東に進み、最後は、「同しノ西半町」という本ノキの屋敷地37筆で終わっている。道路より北側の土地を東方に順番に登録し、東端の屋敷地を記載した後、南側の土地を西方に進んだのであろう。

翌日の2日は、龍宝寺（古城之中）、三ノ段、詰ノ段（同しノ東下が2筆続いて）（同しノ南が2筆）、千光寺中三ダン、厄人ノ段、などであり、甲浦城を登録しているのではないかと考えられる。

なお、表紙には「寛文四(1664)年五月廿一日 本行校合併算、寛文九(1669)年三月十八日 傍記校合」と注記され、本地検帳が寛文年間に校合されている点にも留意したい。

4) 教育やツーリズムへの活用について

現代日本では、2020年東京オリンピック開催を控えてインバウンドが話題になっている一方で、少子高齢化の進行は不可避であり、その対策は、地域社会においても急務である。「教育やツーリズムへの活用」は、まさしくその点に対する活路になり得る。日本では地震がいつ起こってもおかしくないことは、既にワールドワイドに知られており、南海・東南海トラフ地震への対応も不可避である。津波が襲う事態は、なるべくなら避けたいところではあるが、実際には無理である。たとえ起こっても、訪問外国人も含めて、十分な対策が打たれていることが重要であると言えよう。本研究は、そのための基礎的な研究、と位置付けられる。

高知県立歴史民俗資料館所蔵、文化14(1817)年「土佐国浦々之図」のうち「津呂浦分三津浦・東寺領高岡」について示したように、歴史地理学でのへんろ道研究との接合は、ツーリズムとも結び付けられる可能性があるだろう。

[文献]

- 藤田裕嗣, 2017, 『元禄『堺大絵図』に示された堺の都市構造に関する総合的研究』, 148ps., 編著 国立歴史民俗博物館研究報告、204.
- 石井 進, 1974, 『中世武士団』, 390ps. 小学館.
- 川村源七 (高知県立図書館) 『長宗我部地検帳 安芸郡 上』高知県立図書館,
- 小林健太郎, 1986, 『戦国城下町の研究』, 352ps. 大明堂.
- 目良裕昭, 2018, 「室戸岬の中世港町と土佐沖航路」, 高知県立歴史民俗資料館研究紀要, 22, 29-43.